

三 谷 遺 跡

第 二 次 調 査

—広島市安芸区中野東町所在—

2010

財団法人広島市文化財団

は し が き

広島市安芸区旧瀬野川町域を流れる瀬野川は、広島市の中でも大きな川の一つで、両岸には住宅地や田畑、山並が連なり、自然に恵まれた景観となっています。

さて、この瀬野川流域では、東広島バイパスの建設工事などに伴って、近年、発掘調査が進められ、弥生時代から古墳時代にかけての様子が明らかになって来ました。弥生時代の集落跡を確認した三谷遺跡の第一次発掘調査も、その一環として行われたものです。

今回、第一次調査区に隣接する一画で行われた第二次調査では、前回の調査で見つかった集落がさらに北側へ広がっていたことを確認するなど、貴重な成果を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。最後になりましたが、この調査にあたってご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、ならびに調査に従事していただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成 22 (2010) 年 3 月

財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課

例 言

1. 本書は、広島市安芸区中野東町における安芸 1 区中野瀬野線建設工事に伴い、平成 21 年度に実施した三谷遺跡第二次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書は 2006 年 3 月に刊行した『(財) 広島市文化財団発掘調査報告書第 13 集 三谷遺跡 ―広島市安芸区中野東三丁目・中野東町所在―』の付編であり、「位置と環境」は省略している。「位置と環境」については、前掲報告書を参考にされたい。
3. 発掘調査は、広島市安芸区役所農林建設部土木課から委託を受け、財団法人広島市文化財団が実施した。
4. 本書の執筆は、Ⅰを松田雅之が、Ⅱ・Ⅲを田村規充が行い、田村が編集した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は田村・松田が実施した。遺物の実測及び図面の製図は田村が、写真撮影は田村・梶木敬太が実施した。
6. 本書に掲載した航空写真の撮影は、株式会社イビソク広島営業所に委託した。
7. 第 2 図における基準点のデータは下記のとおりである。
基準杭 1 $X = -178547.157$ $Y = 38216.812$
基準杭 2 $X = -178548.061$ $Y = 38202.125$
8. 本書に掲載した挿図の方位は、全て磁北である。
9. 本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。
SH：竪穴住居跡 SX：テラス状遺構 SK：土坑 P：ピット
10. 本書に使用した遺構番号は第一次調査から継続した番号となっている。
11. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』(2003 年版 日本色研事業株式会社発行)に拠った。
12. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	4
II 遺構と遺物	7
III まとめ	29

挿 図 目 次

第 1 図 三谷遺跡周辺地形図	5
第 2 図 遺構配置図	6
第 3 図 基本層序	7
第 4 図 SH23・25・26・27・28・29・30・SX18・19・SK15・16・17 実測図	9
第 5 図 SX17 実測図	16
第 6 図 出土遺物実測図 1	26
第 7 図 出土遺物実測図 2	27
第 8 図 出土遺物実測図 3	28

付 表 目 次

第 1 表 三谷遺跡第二次調査出土土器観察表	20
第 2 表 三谷遺跡第二次調査出土金属器・石器観察表	24

図 版 目 次

図版 扉 三谷遺跡遠景（航空写真・調査前）	図版 8 a SX19・SK17
図版 1 a 三谷遺跡遠景（航空写真・調査前）	b SK15
b 三谷遺跡（航空写真・調査後）	図版 9 a SK15 土層断面
図版 2 a SH23	b SK16
b SH25・26・27	図版 10 a SX17
図版 3 a SH25・27 遺物出土状況	b SX17 遺物出土状況
b 銅鏃出土状況	図版 11 出土遺物（1）
図版 4 a SH26 床面検出状況	図版 12 出土遺物（2）
b SH27 床面検出状況	図版 13 出土遺物（3）
図版 5 a SH28・29・SX18	図版 14 出土遺物（4）
b SH29・SX18・19・SK17	図版 15 出土遺物（5）
図版 6 a SH28 遺物出土状況	図版 16 出土遺物（6）
b SH29b 床面検出状況	
図版 7 a SH30	
b SH30 遺物出土状況	

I はじめに

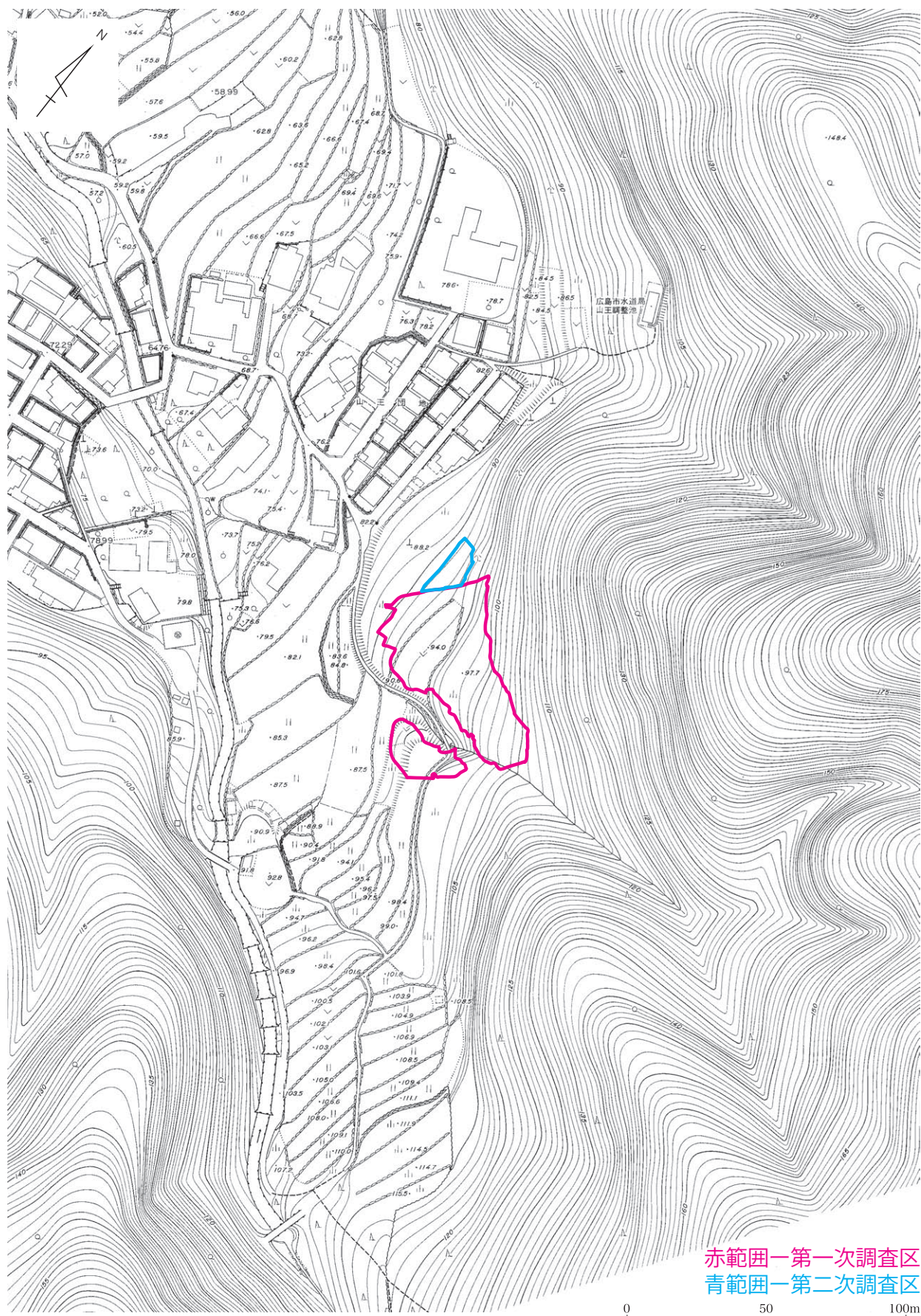
広島市市民局文化スポーツ部文化財課は平成 20 年度に、広島市安芸区役所農林建設部土木課（以下「安芸区土木課」）より、安芸 1 区中野瀬野線建設工事事業地内における遺跡の取り扱いについて照会を受けた。当該地は、平成 13 ～ 15 年に調査を実施した三谷遺跡の遺構が継続する場所にあたり、遺構の継続が判明している場所以外での遺構の有無を確認するために、試掘調査を実施した。その結果、遺構があると想定される範囲が確定され、その取り扱いについて両者で協議が行われたが、計画の変更は困難であり、記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで、安芸区土木課は平成 21 年 1 月 23 日に、財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」とする）に発掘調査の実施を依頼した。これを受け、文化財団文化科学部文化財課では、現地調査を平成 21 年 10 月 1 日から平成 21 年 12 月 18 日まで実施した。報告書作成は平成 21 年 12 月から平成 22 年 3 月にかけて実施した。

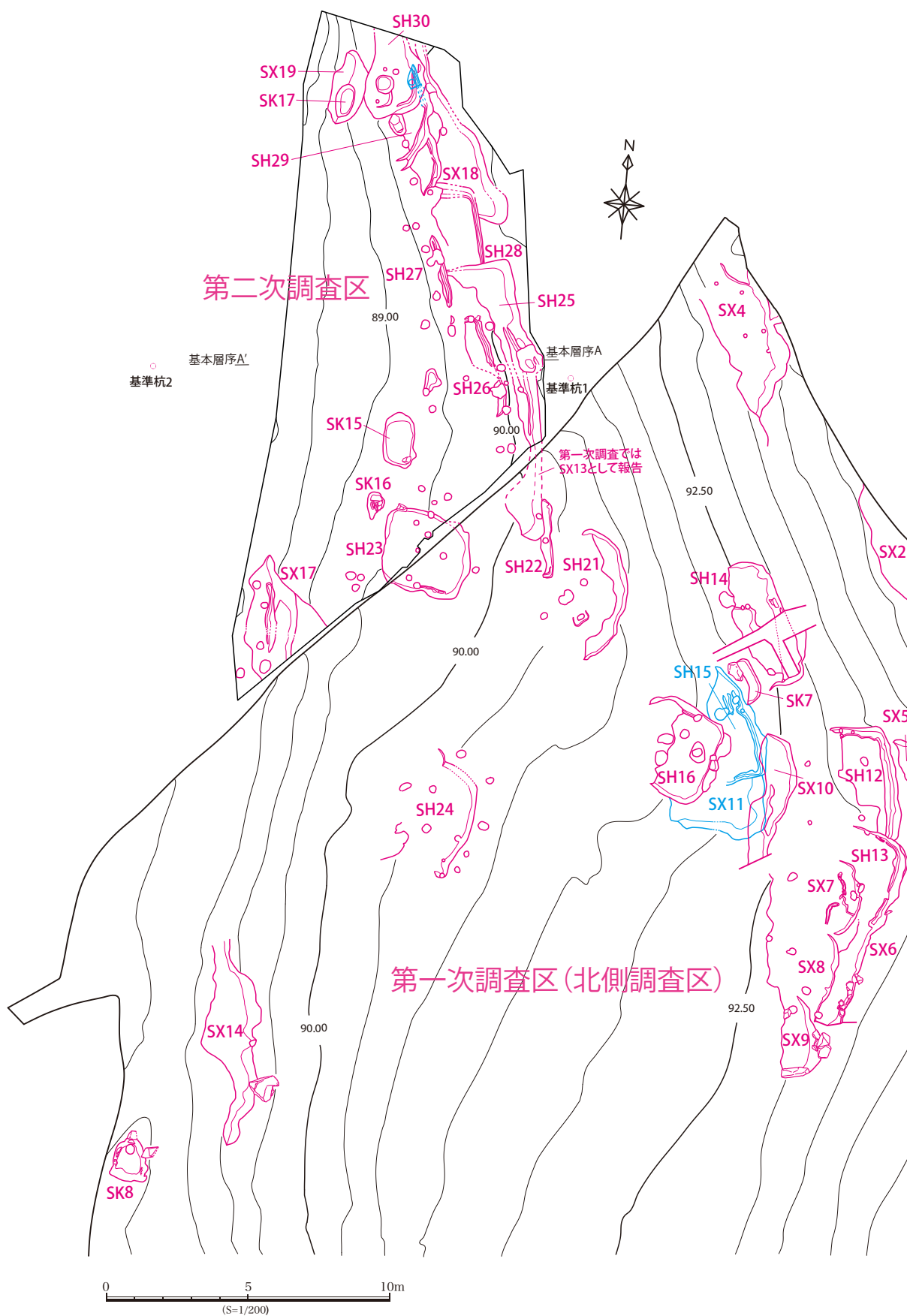
発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者	広島市安芸区役所農林建設部土木課
調査主体	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
調査関係者	生田文雄 理事長 原田康夫 常任顧問 山田 稔 常務理事 石田正博 文化科学部長 幸田 淳 文化財課長 若島一則 文化財課主任指導主事
調査担当者	田村規充 学芸員 松田雅之 学芸員
調査補助員	生田悟之、岩村京子、植木真澄、尾崎紀雄、加藤恒子、香原辰男 澤岡忠重、中村春男、庭尾勝美、森田美恵子、山本文宏、和田実千代
整理作業員	佐伯ひとみ 酒本由理郁、菅原彰子、住川香代子、橋本礼子

なお、安芸区土木課、広島市市民局文化スポーツ部文化財課、中野地区の住民の方々には調査を円滑に進めるに当たって多大な御配慮と御協力をいただいた。ここに記して謝意を表したい。



第1図 三谷遺跡周辺地形図 (S=1/2000)



第2図 遺構配置図 (S=1/200)

Ⅱ 遺構と遺物

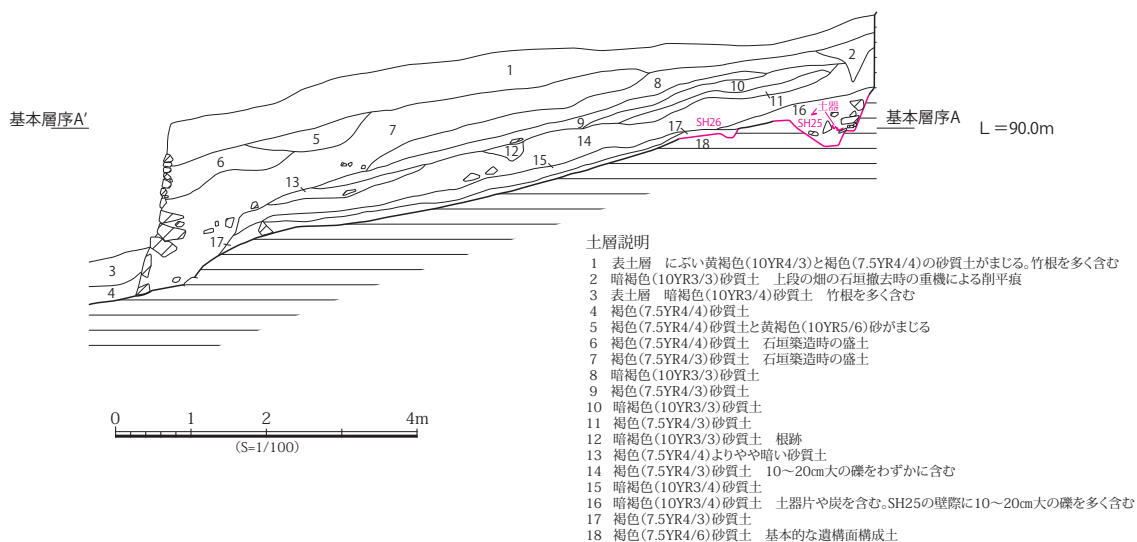
1. 調査の概要（第1・2図）

本遺跡は、鉾取山（標高 711.5m）の西南西に位置する峰（標高 676m）から西北西へ下る尾根筋の中腹に位置する。今回の調査範囲は、第一次調査における北側調査区の北西端に隣接しており、調査前には段々畑が形成されていた。広島市市民局文化スポーツ部文化財課の試掘調査により、今回の調査区の西側の段では、遺構面が削平されていたことが判明したので、SH23 と SX13 の続き部分の検出が想定できる段を範囲とし、調査を開始した。調査区は東から西方向へ緩やかに傾斜し、東端最高所で標高 90.81m、西端最低所で標高 87.97m である。

調査の結果、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構として、竪穴住居跡 7 軒（SH23, SH25～SH30）、テラス状遺構 3 か所（SX17～SX19）、土坑 3 基（SK15～SK17）を確認した。遺物は弥生土器・鉄器・青銅器・石器などが出土した。

2. 基本層序（第3図）

本調査区では試掘溝を 5 本設け、土層観察を行った後、調査を実施した。その中で本調査区の堆積状況を良く表している A—A' を基本層序として述べる。基本的に弥生時代の遺構面は 18 層上に形成されている。この 18 層より下は、第一次調査と同じく土石流を含む厚い堆積層であり、花崗岩が風化したいわゆる地山ではない。また、調査前は畑であったため、少なくとも 7 層より上層については畑の造成時、もしくは造成後の堆積層である。特に石垣の築造時に、裏込め部分が 18 層も含めて、大きく削り込まれていた。また 14 層は礫が含まれた土石流層である。第一次調査で確認した土石流層と比較すると、礫も 10～20 cm 大と小さく、層の中に散見される程度の量



第3図 基本層序（S=1/100）

であった。これは、本調査区が第一次調査区と比較して、谷筋から高い位置にあり、土石流の本流から外れていたためと考えられる。とはいえ、土石流や自然な土の流出も含めて遺構面がかなり流失していることを確認した。

3. 遺構

これから述べる各遺構の時期決定については、主に若島一則氏による広島湾沿岸における弥生土器の編年¹⁾を参照している。また、弥生土器の形態による時期分類と時代との対応は以下のように想定している。

I 期：弥生時代後期初頭，Ⅱ－1 期：弥生時代後期前葉，Ⅱ－2－①期：弥生時代後期中葉
Ⅱ－2－②期：弥生時代後期中葉，Ⅱ－2－③期：弥生時代後期後葉
Ⅱ－3 期：弥生時代後期末葉，Ⅲ－1 期：古墳時代初頭

○ SH23・25・26・27・28・29・30・SX18・19・SK15・16・17（第4図）

SH23 は調査区の南端、標高 89.5m 付近に位置する竪穴住居跡である。第一次調査で、半分を確認していた。西壁の南側 1/2 が流失しているが、床面はほぼ残存している。床面規模は東西約 280cm，南北約 250cm で、平面形状は歪な長方形である。床面最高所は標高 89.51m，残存する壁高は最高 35cm である。壁溝は南壁の東側に約 90cm の範囲で確認し、幅 3～8cm，残存する深さ 6cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P1，P2 の 2 基と考えられる。P1 は底面形状が長径 10cm，短径 8cm の長円形で、底面標高約 89.18m である。P2 は底面形状が長径 12cm，短径 10cm の長円形で、底面標高約 89.37m である。P1－P2 間の柱間距離は約 165cm となる。

SH23 の床面からは第一次調査時に刀子が出土している。時期を決定できる遺物は出土していないが、土層観察により、後述の SH25 よりも新しい時期の遺構である。

SH25 は SH23 から北東へ約 2m，調査区の南東端、標高 90m 付近に位置する竪穴住居跡である。中央部と北壁の一部、第一次調査区域の北側は試掘溝で削平されている。第一次調査では約 1/3 程度を確認していたが、床面の検出にとどまっていたため、SX13 として報告していた。東壁及び北壁と南壁の一部が南北約 920cm，それに伴う床面は南北約 720cm，東西約 20～105cm の範囲で残存するが、それ以外の部分は流失している。残存部から推定できる平面形状は方形である。床面最高所は標高 90.13 m，残存する壁高は最高 42.6 cm である。壁溝は東壁の中央に約 390cm の範囲で確認し、幅 5～15cm，残存する深さ 3～7cm である。なお、壁溝は北端から約 1m の位置で土坑によって分断されている。この土坑は、東側を住居の東壁と共有しており、平面形状は長方形を意識していると想定されるが、底面形状は歪な長円形である。底面規模は長径 38cm，短径 22cm で、現状の深さは東側で 62cm，住居床面からの深さは 35.4cm，底面標高は約 89.76m である。第 2 図基本層序 A－A' における土層観察や検出状況により、この土坑は本住居に伴うも

のと考えられる。平面形状や規模から、用途としては貯蔵用、収納用などが想定される。なお土坑内や土坑の南側床面の埋土からは 10 ～ 30cm 大の角礫が確認された。これは住居の廃絶後、他の住居跡などを造る際に土石流層から出土していた礫を廃棄したものと考えられる。

現存する主柱穴は位置と規模から P3 ～ P6 の 4 基と考えられる。また、床面と主柱の位置関係から P4 － P3 ラインの延長上、第一次調査区の試掘溝で削平された部分に主柱穴が想定できる。P3 は底面形状が長径 12cm、短径 10cm の長円形で、底面標高約 89.70m である。P4 は底面形状が長径 19cm、短径 12cm の長円形で、底面標高約 89.72m である。P5 は底面形状が長径 20cm、短径 17cm の長円形で、底面標高約 89.66m である。P6 は、底面形状が長径 22cm、短径 16cm の長円形で、底面標高約 89.68m である。P3 － P4 間の柱間距離は約 135cm、P4 － P5 間と P5 － P6 間の柱間距離は約 150cm となる。この他に、可能性としては、壁との位置関係から P7 が考えられる。P7 は底面形状が長径 28cm、短径 12cm の長円形で、底面標高約 89.48m のピットである。P6 － P7 間の柱間距離は約 140cm と位置的には SH25 の主柱である可能性はあるが、P3 ～ P6 と P7 の底面標高には約 20cm の差があるため、断定するにはいたらなかった。

ここで本住居の規模を想定してみたい。南北の主柱穴ラインをそのまま東西にあてはめて、正方形の住居を想定することも可能だが、本遺構が地山ではなく、地盤の安定しない堆積層に造られているため、一辺 920cm の正方形の大型住居とするよりは、長方形の住居を想定したい。

SH25 床面からは、弥生土器（1 ～ 4）が、埋土からは弥生土器（5・6）、台石（36）が出土している。また、銅鏃（35）は SH25 上と想定される範囲内の遺構面形成層直上の埋土から出土しており、原位置ではないものの、SH25 に伴うものと考えられる。弥生土器の形態からⅡ－2－③期に属すると考えられる。

SH26 は SH25 の残存部分の西側約 35cm に位置する竪穴住居跡である。中央部と北壁の一部は試掘溝で削平されている。東壁及び北壁と南壁の一部とそれに伴う床面が南北約 350cm、東西約 20 ～ 60 cm の範囲で残存するが、それ以外の部分は流失している。残存部から平面形状は方形と推定できる。床面最高所は標高 89.92m、残存する壁高は最高約 9cm である。東壁の中央付近から北壁の壁面に沿って壁溝を確認し、残存する規模は、幅 4 ～ 8cm、深さ約 6cm である。

残存状態が悪いため、SH26 の規模は想定し得なかった。

SH26 に伴う遺物は出土していないが、土層観察により、SH25 よりも先行する。

なお、SH26 の床面西端から約 130cm 南西側に、歪な窪みが確認された。底面の規模は長辺で約 60cm、短辺で約 30cm であり、底面標高約 89.25m である。埋土中にいくらか炭を含んでいることから、炉の可能性もある。位置的には SH26 の床面内におさまる可能性もあるが、SH26 に伴うものかどうかは、検出状況や残存状況からは明確にし得なかった。

SH27 は SH26 の北西側約 65cm に位置する竪穴住居跡である。東壁の一部とそれに伴う床面が南北約 255cm、東西約 10 ～ 25 cm の範囲で残存するが、それ以外の部分は流失している。床面最高所は標高 89.81m、残存する壁高は最高約 13cm である。残存する壁面に沿って壁溝を確認した

が、北端から約 50 ～ 100cm の範囲は根による攪乱を受けていた。壁溝の残存する規模は、幅 6 ～ 10cm、深さ約 3cm である。

現存する支柱穴は壁面との位置関係と規模から P8 ～ P11 の 4 基と考えられる。P8 は底面形状が長径 15cm、短径 12cm の長円形で、底面標高約 89.35m である。P9 は底面形状が長径 17cm、短径 12cm の長円形で、底面標高約 89.42m である。P10 は底面形状が長径 15cm、短径 11cm の長円形で、底面標高約 89.05m である。P11 は底面形状が長径 14cm、短径 8cm の長円形で、底面標高約 89.36m である。ここで、P10 とその他のピットとの底面標高の差が約 30cm あることに注目したい。P10 は SH25 の P7 の場合と異なり、対応する P11 が確認できたこともふまえ、本遺構が傾斜面で、かつ地山ではなく、地盤の安定しない堆積層に造られているため、傾斜の低い側はより深くピットを掘る必要性があり、底面標高の差が生じたと考えられる。P10 － P8 間の柱間距離は約 100cm、P8 － P9 間の柱間距離は約 170cm、P9 － P11 間の柱間距離は約 100cm である。

残存する東壁ラインと支柱の配置から考えると、本住居は多角形の平面形状を持つと想定されるが、残存状態が悪く、規模は想定し得なかった。

また、残存する本住居東壁の南端から約 30cm の距離から弥生土器（7）が出土した。出土の状況と位置から、この土器は SH27 に伴うものと考えられる。この弥生土器は、形態からⅡ－1 期に属すると考えられる。

SH28 は SH25 の北側に切り合う形で位置する竪穴住居跡である。北壁と床面の一部は試掘溝で削平されている。東壁及び北壁とそれに伴う床面が南北約 250 ～ 270cm、東西約 110 ～ 150 cm の範囲で残存するが、南側は SH25 により削平され、それ以外の部分は流失している。残存部から想定できる平面形状は方形である。床面最高所は標高 90.15m、残存する壁高は最高約 13cm である。残存する壁面に沿って壁溝を確認し、規模は、幅 6 ～ 17cm、深さ約 3cm である。

残存する壁面の状況から、試掘溝内に支柱の存在が想定されるが、残存状態からは、本住居の規模については想定し得なかった。

SH28 からは、弥生土器（8・9）が出土しており、その形態からⅠ期に属すると考えられる。

SH29 は SH28 の北西側に切り合う形で位置する竪穴住居跡である。また試掘溝で分断されているが、後述の SH30 の遺構面埋土上にも床面を確認した。本住居跡は壁の検出状況と壁溝の状況から 1 回の建て替えが想定される。以下、建て替え前を SH29a、建て替え後を SH29b と呼称し、述べていくこととする。

SH29a は東壁及び南壁の一部とそれに伴う床面が南北約 300cm、東西約 10 ～ 60 cm の範囲で残存するが、それ以外の部分は流失している。残存部から想定できる平面形状は円形である。床面最高所は標高 89.93m、残存する壁高は最高約 25cm である。残存する壁面に沿って壁溝を確認した。規模は、幅 5 ～ 20cm、深さ約 5cm である。

現存する支柱穴は壁面との位置関係と規模から P12 と考えられる。P12 は底面形状が長径

13cm, 短径 10cm の長円形で, 底面標高約 89.71m である。

また, P12 から北西側へ約 20cm の距離に長径約 80cm, 短径約 55cm の歪な長円形の掘り込みを確認した。この掘り込みの北西側は流失しているが, 南東側に長さ 25cm 幅 8cm の半月状の段を持つ。この段は深さ約 5cm で, さらに約 10cm 掘り込んで, 残存する平面形状が一辺約 30cm の方形の底面を形成している。底面標高は約 89.61m である。その形状や床面での位置, また埋土に炭を多く含んでいたことから炉跡であると考えられる。

壁面の状況と炉跡の位置から, SH29 a の平面形状は円形ないしは長円形と想定されるが, 残存状態が悪く, その規模を想定するには至らなかった。

なお, SH29a の壁溝を SH29b の床面検出後に確認したため, SH29a を SH29b よりも先行するものと想定した。

SH29 b は SH29a の東壁を共有する形で, 建て替えられており, 南壁へ向かって約 50cm ほどカーブを描いた部分まで残存する。床面は南北約 400cm, 東西約 10 ～ 90 cm の範囲で残存するが, それ以外の部分は流失している。拡張部の床面最高所は標高 89.92m, 残存する壁高は最高約 20cm である。残存する壁面に沿って壁溝を確認した。壁溝は南端から約 110cm 付近で一部途切れているが, 途切れている部分と隣接する壁溝底面のレベル差がほとんど無いことから, 流失したもので本来はつながっていたと考えられる。規模は, 幅 3 ～ 13cm, 深さ約 3cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P13 と考えられる。P13 は底面形状が長径 13cm, 短径 11cm の長円形で, 底面標高約 89.67m である。また壁との位置関係から P12 を SH29a と共有していた可能性もあり, P13 - P12 間の柱間距離は約 135cm となる。その場合, P13 - P12 ラインを 135cm 程度延長した位置に主柱の存在を想定できる。

ここで SH29b の平面形状を考えてみたい。残存する壁のラインを見ると, 東壁のラインはおおむね直線的で, 南壁に向かって緩やかなカーブを描いており, 隅丸方形と想定される。規模については, 残存状態が悪く想定し得なかった。

SH29 に伴う遺物は出土していないが, 検出時の切り合い関係により SH28 よりも新しく, L - L' の土層観察により, 後述の SH30, SX18 よりも新しい。

SH30 は SH29 の北側に接して位置する竪穴住居跡である。北側は調査範囲外へ延びている。東壁と南壁の一部とそれに伴う床面が南北約 220 ～ 270cm, 東西約 100 ～ 190 cm の範囲で残存するが, それ以外の部分は流失している。床面最高所は標高 89.65m, 残存する壁高は最高約 31cm である。残存部から想定できる平面形状は方形である。東壁から南壁にかけて壁溝を確認した。壁溝の残存規模は, 東壁で約 100cm, 南壁で約 60cm の範囲で, 幅 5 ～ 11cm, 深さ約 2cm である。

主柱穴は壁面との位置関係と規模から P14 と考えられる。P14 は底面形状が長径 13cm, 短径 9cm の長円形で, 底面標高約 89.44m である。

P14 の南西側では, 約 70 × 75cm の範囲で焼土を検出した。この焼土層の厚さは最大で約 8cm である。焼土層の下からは, 直径約 65cm の円形の掘り込みとその掘り込みの南東側からのびる約 70cm の半月状の掘り込みを確認した。深さは, 半月状の掘り込みで約 6cm, 円形の掘り込み

で約 7cm, 半月状の掘り込み底面から円形の掘り込み底面までの深さは約 2cm である。円形の掘り込み底面の平面形状も直径約 45cm の歪な円形で、底面標高は約 89.48m である。これらの掘り込みの西側床面の残存状況から、半月状の掘り込みの西側は東側と同様、円形の掘り込みにつながる可能性が考えられ、2 つの掘り込みは一体のものと想定される。この掘り込みは、その形状や床面での位置、焼土の存在などから炉跡であると考えられる。また、円形の掘り込みの北側 16cm の位置と南側 28cm の位置に、底面形状が直径約 5cm, 深さ 3 ～ 4cm の小ピットを確認した。これらのピットは炉に伴う施設のものと考えられるが性格は明らかにし得なかった。

本住居の規模については、残存状態が悪く、想定し得なかった。

SH30 床面直上からは弥生土器 (10 ～ 13) が、埋土からは弥生土器 (14) が出土している。弥生土器の形態からⅡ－1 期に属すると考えられる。

SX18 は調査区の北東端に位置するテラス状遺構である。北側が調査範囲外に延びており、遺構全体は確認し得なかった。また西側は SH28・29・30 と切り合っており、平坦面が削平されたり、流失している可能性がある。東壁は調査範囲内で約 610cm, 東壁南端から方向を変じて延びる南壁は約 50cm 残存する。壁高は最高で 38cm である。平坦面は東壁に沿って、奥行 7 ～ 150cm の範囲で残存し、平坦面最高所は標高 90.29m である。平坦面は南から北へ緩やかに傾斜し、約 480cm の位置で段になっている。段の長さは約 45cm で比高差は約 15cm である。平坦面の北端での標高は約 89.98m である。

北側は調査範囲外であり、西側は流失しているため、本遺構の性格は想定しにくい。壁のラインが歪であることや平坦面が地形に沿って南から北へ緩やかに傾斜することから、通路としての用途が考えられる。

SX18 からは弥生土器 (19・20) が出土しており、その形態からⅡ－2－②期に属すると考えられる。

また、床面検出後に SH28 掘り方を検出したことから SH28 よりも新しく、L－L' の土層観察により、SH29 よりも先行する。SH30 との先後関係については、明確にし得なかったが、出土土器の時期から、SH30 よりも新しいと想定される。

SX19 は SH30 の西側に切り合う形で位置するテラス状遺構である。西側が畑の造成に伴い削平されており、遺構全体は確認し得なかった。東壁は約 240cm, 東壁北端からほぼ直角に方向を変じて延びる北壁は約 30cm 残存する。壁高は最高で 75cm である。平坦面は東壁に沿って、奥行 20 ～ 59cm の範囲で残存し、平坦面最高所は標高 88.85m である。なお、平坦面北端から東壁に沿って、南へ約 100cm の位置には SK17 を確認した。

SX19 は残存部が少ないため、性格については想定できなかった。また、SX19 に伴う遺物は出土していないが、検出時の切り合い関係により SH30 より新しく、検出状況から SK17 とは同時期のものと考えられる。

SK15 は SH23 の約 150cm 北側に位置する土坑である。平面形状は長方形で、底面の規模は約 150 × 80cm、深さは最高 45cm、底面標高は約 88.78m である。底面南東隅には 20cm 大の石が土石流層から露出している。

掘り方の埋土内には 20 ～ 50cm 大の角礫が多量に確認された。また G - G' の 1 層にあたる埋土ではカキ殻が大きく分けて 2 箇所から出土した。カキ殻層は最も大きな範囲で約 10cm 四方、厚さ 3cm 程度である。

SK15 は、規模・形状から貯蔵用と考えられる。また、想定される SH25 の床面範囲内に位置することから、本来は SH25 の内部に築造された土坑である可能性も考えられる。埋土内の角礫は、本遺構の廃絶後に、他の住居跡などを造る際に土石流層から出土していた礫を廃棄したものと想定されるが、G - G' の 2 層直上にカキ殻が廃棄されていることから、掘り方内を一気に埋めたのではなく、段階的に埋めたものと考えられる。

SK15 埋土からは、弥生土器（21 ～ 24）が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、その形態からⅡ - 3 期～Ⅲ - 1 期の時期に属すると考えられ、本遺構の廃棄時の下限はⅢ - 1 期と想定される。

SK16 は SK15 の約 150cm 南西側に位置する土坑である。掘り方の平面形状は歪な長円形で、掘り方内に一段平坦面を確認した。平坦面は長さ約 40cm、幅約 20cm の半円状で、掘り方からの深さは最高 30cm である。底面形状は長径約 25cm、短径約 15cm の長円形、底面標高は約 88.8m、掘り方からの深さは最高 53cm である。底面中央や掘り方から底面に至る壁面には 20 ～ 40cm 大の石が 3 つ土石流層から露出している。掘り方の埋土内には 20 ～ 30cm 大の角礫を多量に確認した。

SK16 は傾斜面上に位置しているため、本来の掘り方は現状より高い位置で広い範囲から掘り込まれていたと想定し得る。その場合でも底面規模は狭く、その形状からも用途を想定しにくい。埋土中に角礫が多量に存在していたことをふまえると、初めから、他の住居跡などを造る際に土石流層から出土していた礫を廃棄する目的でつくられた土坑とも想定できる。

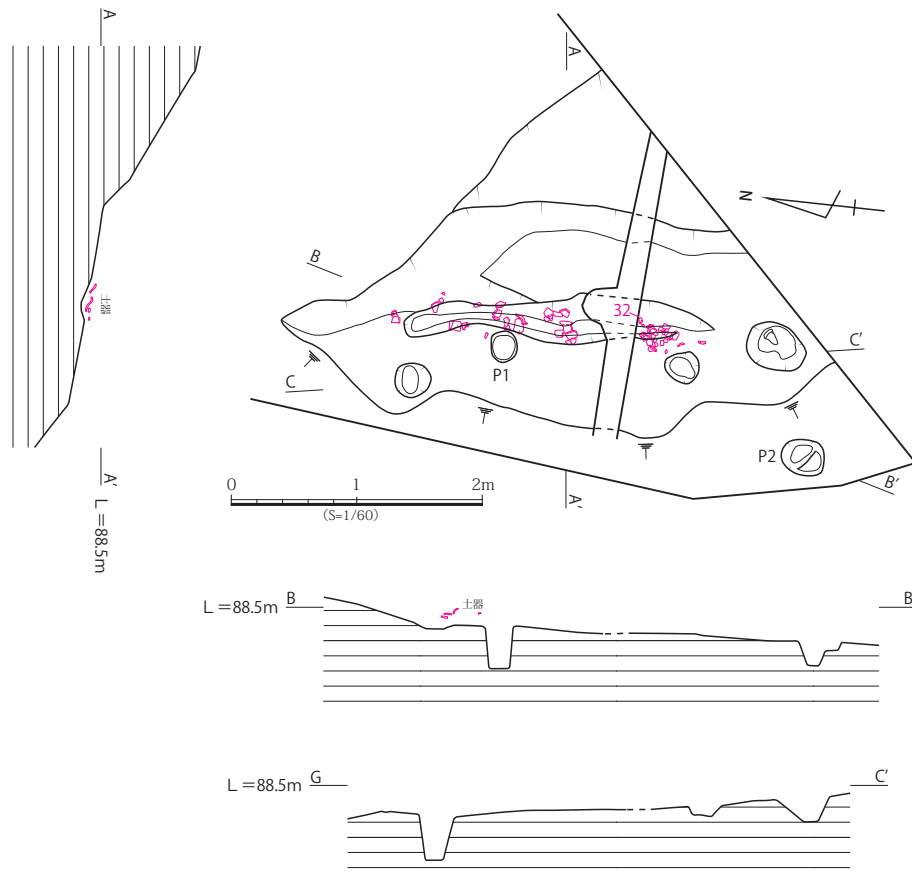
なお、SK16 に伴う遺物は出土していない。

SK17 は SX19 内で確認された土坑である。平面形状は長円形で、底面の規模は長径約 90cm、短径約 40cm、深さは最高 47cm、底面標高は約 88.54m である。SX19 の平坦面からの深さは最高 15cm である。掘り方の埋土内には 20 ～ 30cm 大の角礫を多量に確認した。

SK17 は先述のように検出状況から SX19 と同時期のものと考えられ、貯蔵用としては掘り込みが浅く、残存状況からは用途を想定し得なかった。埋土中に角礫が多量に存在することから、何らかの用途を終えた後に、他の住居跡などを造る際に土石流層から出土した礫を廃棄したものと考えられる。

SK17 埋土からは、弥生土器（25）が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、その形態から廃棄時の下限はⅡ - 2 - ②期と想定される。

ここで、それぞれの遺構の先後関係を見てみると、基本層序 A－A' (第 2 図), L－L' の土層観察, 出土土器の時期, 遺構検出時の切り合い関係から SH28 → SH30・SH27 → SX18・SX19・SK17 → SH25 → SK15 となる。SH23・SH26・SH29・SK16 については, 明確な時期決定はし得なかった。ただし, SH23 は SH25 よりも新しいこと, SH26 は SH25 に先行し, SH27・28 と同時期には存在し得ないこと, SH29 は SH28・30・SX18 よりも新しいことは想定できる。



第 5 図 SX17 実測図 (S=1/60)

○ SX17 (第 5 図)

SX17 は調査区の南西端に位置するテラス状遺構である。南側が第一次調査区に延びているが, 第一次調査時には確認し得なかったため, 大きくは延びないと想定される。中央は試掘溝で, 西側は畑の石垣築造時に削平されていた。東壁のみが残存し, 南端から約 170cm 北方向へ直線的に, そこから北西へ角度を変じて約 200cm 内湾気味に延びる。壁高は最高で 30cm である。また, 東壁に向けて最大 110cm 東に離れた位置から掘り込みがなされている。掘り込みは東壁南端から 220cm の地点まで続き, A－A' 断面を見ると, 緩やかな傾斜で東壁に下り, 東壁掘り方からは,

急傾斜となる。この掘り込みは、傾斜面に本遺構をつくる際に、急角度で壁を掘り込んで崩れるのを防ぐための施設と考えられる。平坦面は東壁に沿って、奥行 10 ～ 150cm の範囲で残存し、平坦面最高所は標高 88.57m である。

北端から約 107cm 離れた東壁際から南へ向け、東壁と平行に掘り込まれた溝状遺構を確認した。規模は、長さ 247cm、幅 4 ～ 10cm、深さ約 10cm である。この溝状遺構からは弥生土器が出土した。完形に近い形で復元できる土器も含まれており、ほぼ原位置で出土していると考えられる。そのことから、溝状遺構は、土器を置いておく用途で使用された可能性がある。

また平坦面上に 4 基、平坦面より西側に 1 基の柱穴に匹敵する規模と形状を持つピットを確認した。この中で SX17 の壁面との位置関係や底面標高から主柱を想定すると P1 と P2 の 2 基が考えられる。P1 は底面形状が長径 20cm、短径 18cm の長円形で、底面標高約 88.01m である。P2 は底面形状が長径 18cm、短径 10cm の歪な長円形で、底面標高約 88.05m である。P1 － P2 間の柱間距離は約 250cm となる。

残存状況からは本遺構の性格は想定しにくい、主柱と想定できるピットがあることから、何らかの建物か屋根状の構造物が建つ作業場が考えられる。住居の可能性も考えられるが、残存する壁面ラインからは平面形状が想定し得ないことや壁溝と考えられる溝が確認できなかったことから、テラス状遺構とした。

SX17 からは弥生土器（15 ～ 18）、鉄器（32）が出土しており、弥生土器の形態からⅡ－2－②期～Ⅱ－3期に属すると考えられ、本遺構の時期はⅡ－3期と想定される。

4. 出土遺物

本調査区の出土遺物としては、弥生土器・鉄器・青銅器・石器がある。その中で特徴的なものを報告する。以下、各遺物について述べるが、個々の遺物の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

○弥生土器（第 6 ～ 8 図）

本遺跡から出土した弥生土器について、時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

・弥生時代中期

甕形土器（14）は「く」の字状に強く外反する口縁部を持ち、肩部が張っている。この特徴は中期後葉のものと考えられる（妹尾周三氏による安芸Ⅲ－2 様式²⁾）。

・弥生時代後期

甕形土器（9）や壺形土器（11・12）は、口縁端部が口縁部屈曲点に比べて明らかに肥厚する。（11・12）については端部に 3 条の凹線を施している。また、肩部の低い位置から口縁部にかけて外湾を始め、口縁部屈曲点より若干下の位置で厚みが大きくなるなど、口縁部の接合が屈曲点より下部で行われている。これらの特徴を有するものは後期初頭のものと考えられる（若島一則氏によるⅠ期³⁾）。

甕形土器（7・10）や壺形土器（27）の口縁部の接合は屈曲点近くで行われており、内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をへう削りした痕跡が確認できる。（7・27）で顕著だが、口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化せず、端部付近を強くつまんで肥厚しているように見せている。端部にはいずれも2条の凹線を施す。また、（7・10）の肩部には口縁部屈曲点から若干下がった位置に刺突文をめぐらしている。（27）は底部から胴部にかけて外上方に向かって直線的に立ち上がり、内面のへう削りはいずれの土器も底部に至る。これらの特徴を有するものは後期前葉のものと考えられる（Ⅱ－1期）。

甕形土器（15）は口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化しない。口縁部の接合は屈曲点近くで行われており、口縁部が外上方へ直線的に延びている。内面には、接合の際に余った屈曲点直下の粘土をへう削りした痕跡や口縁部と胴部の境に、接合部分を調整した際の平坦な面が確認できる。これらの特徴を有するものは後期中葉のものと考えられる（Ⅱ－2－②期）。

甕形土器（1・26）や鉢形土器（17）は、口縁部屈曲点から胴部にかけて緩やかにカーブを描き、胴部最大径を中位に持つ。（26）の底部は平底であり、いずれも底部から胴部にかけても緩やかなカーブを描き、全体的なプロポーションが丸みをもつ。これらの特徴を有するものは後期後葉のものと考えられる（Ⅱ－2－③期）。

甕形土器（21）、鉢形土器（18）は、口縁部中位あたりから外に湾曲し、端部も薄くなり、（21）については丸みを帯びる。内面の口縁部屈曲点には接合部分の調整の結果としての平坦面は見られず、（18）は鋭い稜を持つ。いずれも、口縁部屈曲点から胴部、さらに底部にかけても緩やかなカーブを描き、プロポーションが丸みをもつ。（21）の底部は平底ではあるが丸みを帯びている。これらの特徴を有するものは後期末葉のものと考えられる（Ⅱ－3期）。

・古墳時代初頭

壺形土器（23・28・29）は、口縁端部に向け、徐々に薄くしていき、端部は尖り気味に収めている。また口縁部接合時の内面の余った粘土をかきとったり、調整したりした痕跡は見られず、いずれも接合点の粘土のはみ出し痕跡が残っている。（28）に顕著だが、胴部のプロポーションは丸く、底部も丸みを帯びている。また全体に器厚も一定で、前段階のものと比較すると薄くなっている。これらの特徴を有するものは古墳時代初頭のものと考えられる（Ⅲ－1期）。

なお、土器の時期を見ると弥生時代中期から古墳時代初頭のもののまでが、継続的に出土しているが、古墳時代初頭以降に継続して本遺跡で使用されたと考えられる土器は出土していない。

○鉄器（第8図）

本調査区の遺構に伴うものとしては、（32）が、調査区内からは（33・34）が出土した。これらの特徴について概観してみたい。

・不明品（32）

その形状から鑿と考えられるが、身部の大半が欠損しており、板状鉄斧の可能性も考えられる。鑿とするならば、身部の大半が欠損しているが、残存する身部と刃部の幅にほとんど差がなく、川

越哲志氏による分類の A 型⁴⁾にあたる。

・ 鏃 (33)

柳葉式の鏃である。茎部の大半が欠損しているが、関はなく、身の形状は、柳葉式の中でも幅広で太い椿葉形を呈し、川越氏による分類では B1a2 型⁵⁾にあたる。

・ 刀子 (34)

棟側にのみ関がつく刀子で、川越氏による分類ではⅢ型⁶⁾にあたる。

○青銅器 (第 8 図)

本調査区遺構面の直上埋土から、銅鏃 (35) が出土した。有茎小形銅鏃⁷⁾である。身部には基部付近から先まで、全ての端部に欠損痕がある。欠損部を観察すると腸袂が下方へ開くタイプと開かず平基のタイプのどちらの可能性も考えられるため、平面形状は不明である。茎部の断面形状は中央の脊が隆起し、両端が薄くとび出す六角形状である。ただ、茎部の先端付近では、片面で薄いとび出しが見られない部分がある。湯のまわりと研磨の度合いにより生じたものと考えられる。

○石器 (第 8 図)

本調査区の遺構に伴うものとしては、台石 (36) が、調査区内からは、石鏃 (37)・石斧 (38) が出土している。詳細は後掲する観察表を参照されたい。

注

- 1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』 財団法人広島市文化財団 2002 年 以下、後期土器編年は若島氏の編年による。
- 2) 妹尾周三「安芸地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社 1992 年 以下、安芸編年は妹尾氏の様式編年による。
- 3) 1 に同じ。
- 4) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣 1993 年
- 5) 4 に同じ。
- 6) 4 に同じ。
- 7) 安藤広道「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観 6 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』 小学館 2003 年

第 1 表 三谷遺跡第二次調査出土土器観察表

([] : 復元値)

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
1	甕形土器	SH25	口径 [20.6] 胴部最大径 [23.2]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 内面口縁部と胴部下位の一部に黒斑残る。
2	壺形土器	SH25	口径 12.0	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し，その端部に直線的に立ち上がる拡張部が内傾してつく複合口縁。端部は丸みを帯びるものの平らにおさめる。	外面：ナデ 内面：ナデ 外面口縁部には 8 条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：浅黄橙色
3	碗形土器	SH25	底径 3.6	底部から体部にかけては内湾しつつ，体部から口縁部にかけては外湾気味に立ち上がる。底部は平底。	外面：体部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：明赤褐色 体部中位の一部にスス付着。
4	壺形土器	SH25		外上方にのびる口縁部の端部に外湾しつつ立ち上がる拡張部が内傾気味につく複合口縁。口縁端部に向けて厚みを減じ，端部は尖り気味におさめる。	外面：ナデ 内面：ナデ 外面口縁部上位にはヘラ状工具による鋸歯文をめぐらし，下位にはハケ状工具による波状文をめぐらした後ナデ。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色
5	不明	SH25 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい黄橙色 内面 - 灰黄褐色
6	碗形土器	SH25 埋土	口径 11.7 底径 2.1 器高 9.9	底部から体部にかけては直線的に，体部から口縁部にかけてはわずかに内湾気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，体部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部から底部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 外面体部上半と内面底部に黒斑残る。
7	甕形土器	SH27?	口径 16.8 胴部最大径 22.6 底径 4.0 器高 27.2	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部はわずかに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては内湾気味に立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り，底部ナデ 口縁端部に 2 条の凹線を，外面頸部直下にハケ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面 - にぶい黄橙色 内面 - にぶい橙色 外面胴部の中位と下位の一部に黒斑残る。
8	甕形土器?	SH28		口縁部は「く」の字状に外反し，端部はわずかに上下に肥厚し，平らに収める。胴部上位は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：2 ～ 3mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：橙色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
9	甕形土器	SH28	口径 16.2 胴部最大径 [20.0]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：橙色 外面胴部の一部にスス付着。
10	甕形土器	SH30	口径 [12.1] 胴部最大径 [13.1] 底径 3.1 器高 14.1	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては外湾気味に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部上位ヘラ削り後ナデ，胴部から底部ヘラ削り 口縁端部に 2 条の凹線を，外面頸部直下に貝殻腹縁による刺突文をめぐらす。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 黄褐色 内面 - 橙色 外面底部にスス付着。
11	壺形土器	SH30	口径 11.3	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は肥厚しつつ平らに収める。胴部上半は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後一部ナデ 口縁端部に 3 条の凹線を，外面頸部下位に貝殻腹縁による刺突文を羽状に二段めぐる。外面口縁端部直下の一部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：にぶい黄橙色
12	壺形土器	SH30	口径 [13.6]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し，端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部から胴部上位ナデ，胴部中位ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 口縁端部に 3 条の凹線をめぐらす。外面頸部及び胴部上位にはハケ状工具による 5 条の凹線をめぐらし，その間にハケ状工具による波状文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - にぶい黄褐色
13	鉢形土器	SH30		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部上半は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部上位磨耗著しく不明，胴部ヘラ削り 外面頸部直下に貝殻腹縁による刺突文をめぐらした後，中央をナデ。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：外面 - 明黄褐色 内面 - にぶい橙色
14	甕形土器	SH30 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに上下に肥厚し、平らに収める。胴部上位は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
15	甕形土器	SX17	口径 12.4	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部はわずかに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部直下にハケ状工具による刺突文を羽状に二段にめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色 内面 - 明褐色 外面胴部の一部に黒斑残る。
16	甕形土器？	SX17		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄褐色 外面胴部中位の一部に黒斑残る。
17	鉢形土器	SX17	口径 24.5 胴部最大径 [23.8]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，頸部から胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り 口縁端部の一部に櫛歯状工具による波状文を施す。頸部直下に櫛歯状工具による波状文を施した後ハケ目及びナデ。	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色及びにぶい黄褐色 内面 - 明褐色，一部にぶい黄褐色 外面胴部中位の一部に黒斑残る。
18	鉢形土器	SX17	口径 [18.9] 胴部最大径 [19.0] 底径 6.2 器高 13.8	口縁部は「く」の字状に外反し、端部はわずかに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては直線的に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：口縁部ナデ，胴部上位ハケ目後ナデ，中位ハケ目，下位ナデ一部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明赤褐色 内面 - にぶい橙色 外面胴部下半にスス付着。内面胴部中位から底部にかけて黒斑残る。
19	不明	SX18		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は丸く収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：赤褐色 外面にスス付着。
20	不明	SX18		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明褐色 内面 - 橙色
21	甕形土器	SK15 埋土	口径 [12.8] 胴部最大径 [14.2] 底径 2.1 器高 17.4	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部はわずかに丸く収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては内湾気味に立ち上がる。底部はわずかに平底。	外面：口縁部ナデ，胴部上位ハケ目後ナデ，胴部ハケ目，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部にかけてヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - 明赤褐色 内面 - 暗褐色，一部明黄褐色 外面胴部上半の一部にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
22	甕形土器?	SK15 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、 端部はわずかに下方に肥厚しつ つ平らに収める。胴部上位は内 湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削 り 頸部にハケ状工具による刺突文 をめぐらす。	胎土：1～2mm 大の砂粒 含む 焼成：良好 色調：橙色
23	壺形土器	SK15 埋土		頸部から口縁部にかけて「く」 の字状に外湾しつつ立ち上が り，端部は尖り気味に収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部か ら胴部にかけてハケ目 内面：口縁端部ナデ，口縁部ハ ケ目後一部ナデ，胴部ナデ 内面頸部直下にナデ時の指頭圧 痕残る。内面頸部に粘土接合痕 残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
24	碗形土器	SK15 埋土	口径 10.9	体部から口縁部にかけて内湾し つつ立ち上がり，端部は丸くお さめる。	外面：口縁部ナデ，体部下位ナ デ一部ヘラ磨き 内面：ナデ	胎土：1～2mm 大の砂粒 含む 焼成：良好 色調：外面 - 橙色，一部明 赤褐色 内面 - 明赤褐色 体部中位の一部分に黒斑残 る。
25	甕形土器?	SK17 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、 端部は平らに収める。胴部上位 は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削 り 外面頸部直下に貝殻腹縁による 刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい黄橙色 内面 - 橙色
26	甕形土器	調査区内	口径 12.2 胴部最大径 12.8 底径 4.0 器高 13.8	口縁部は「く」の字状に外反し、 端部は平らに収める。胴部は内 湾しつつ立ち上がる。底部から 胴部にかけてはわずかに外湾気 味に立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部から底 部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削 り，底部ナデ	胎土：1～2mm 大の砂粒 含む 焼成：やや軟調 色調：外面 - にぶい黄橙色 内面 - にぶい橙色 外面胴部中位の一部分と内面 口縁部から胴部の一部分に黒 斑残る。
27	壺形土器	調査区内	口径 14.5 胴部最大径 31.0 底径 9.4 器高 42.9	口縁部は「く」の字状に外湾し、 端部は上下に肥厚しつつ平らに 収める。胴部は内湾しつつ立ち 上がる。底部から胴部にかけて は直線的に立ち上がる。底部は 平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 後ナデ及びヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁部上半ナデ，口縁部 下半ヘラ磨き，頸部ナデ，胴部 から底部ヘラ削り 口縁端部に 2 条の凹線をめぐら す。内面頸部直下にナデ時の指 頭圧痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 外面胴部上半の一部分に黒斑 残る。

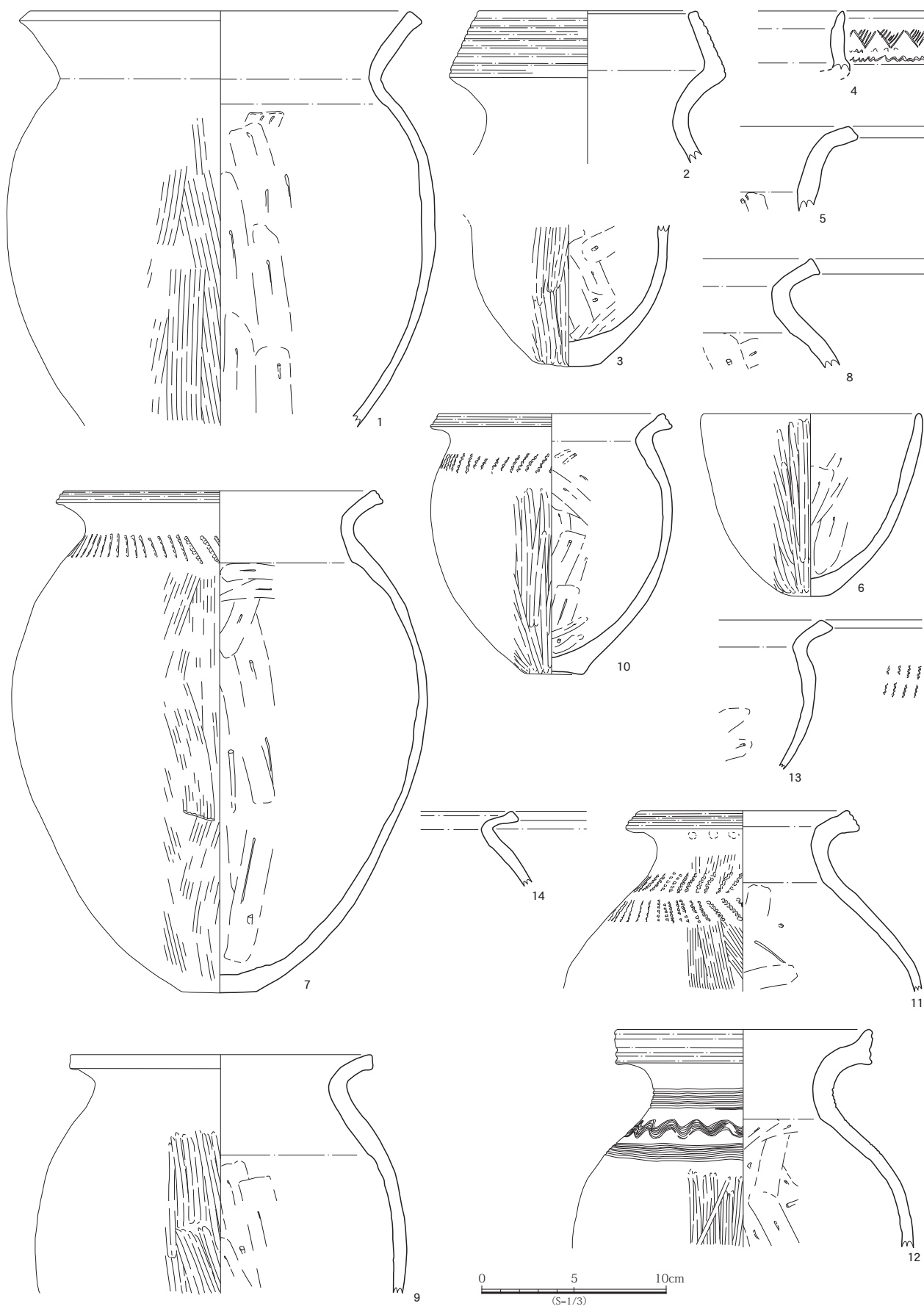
番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	調整・成形	備考
28	壺形土器	調査区内	口径 [9.0] 胴部最大径 [12.5] 器高 13.7	頸部は「く」の字状に外反し、そのまま口縁部は外上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収める。胴部は扁平な球形を呈する。底部は丸底。	外面：口縁端部ナデ，口縁部から底部にかけてヘラ磨き 内面：口縁端部ナデ，口縁部から頸部ハケ目後ナデ，胴部から底部にかけてハケ目 内面頸部直下にナデ時の指頭圧痕残る。内面頸部に粘土接合痕残る。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面 - 明黄褐色 内面 - にぶい橙色
29	壺形土器	調査区内	口径 9.0 胴部最大径 17.3 底径 3.3 器高 25.1	頸部は「く」の字状に外湾し、そのまま口縁部は外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。底部から胴部中位にかけて内湾気味に立ち上がり，そこから頸部にかけて直線的に内傾して立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁端部ナデ，口縁部から底部にかけてハケ目 内面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目，頸部ハケ目後ナデ，胴部上半ハケ目，下半ヘラ削り 内面頸部直下にナデ時の指頭圧痕残る。内面頸部の一部に粘土接合痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面 - にぶい黄褐色 内面 - 橙色 外面胴部下位から底部にかけて黒斑残る。
30	碗形土器	調査区内	口径 9.9 底径 3.6 器高 6.3	底部から体部にかけては外湾しつつ，体部から口縁部にかけては内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後一部ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部から底部ハケ目後ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 外面体部下位の一部分に黒斑残る。
31	碗形土器	調査区内	口径 11.6 器高 7.0	底部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 底部が穿孔されている。

第 2 表 三谷遺跡第二次調査出土金属器・石器観察表

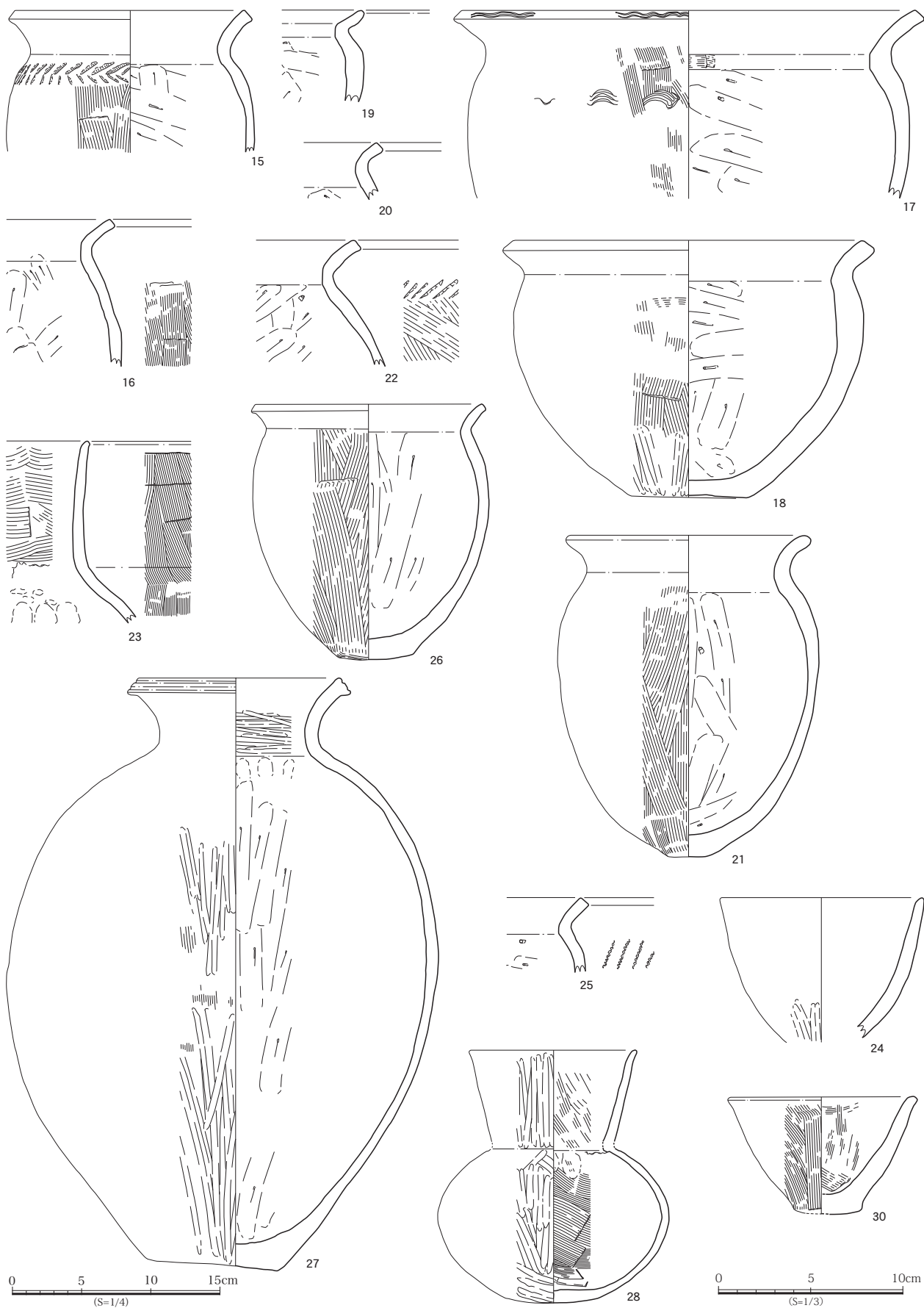
([]：残存値)

番号	種別	出土位置	計測数値 (cm, g)				備考
			長さ	最大幅	断面厚	重量	
32	不明鉄製品	SX17	[3.9]	身部 [1.9] 刃部 2.1	0.7	30.2	鑿？ 断面形状 - 方形 刃部断面形状 - くさび形 身部が欠損している。
33	鉄鏃	調査区内	[3.0]	1.5	0.35	2.9	柳葉式鏃 鏃身部断面形状 - レンズ形 茎部断面形状 - 長方形 茎部の大半が欠損している。
34	鉄製刀子	調査区内	刃部 [2.7] 茎部 3.6	刃部 1.1 茎部 0.8	0.3	6.3	刃の先端部が欠損している。

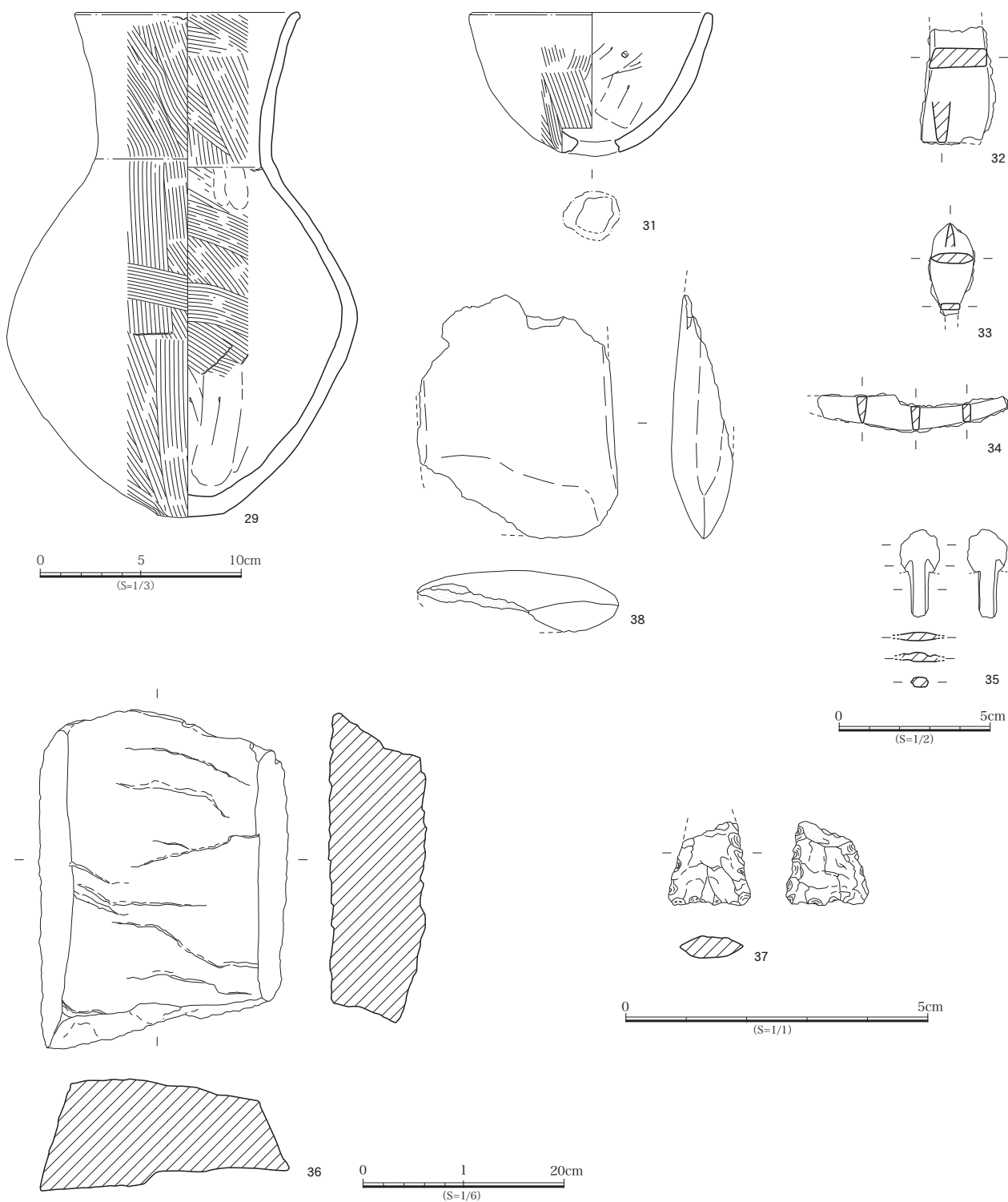
番号	種別	出土位置	計測数値 (cm, g)				備考
			長さ	最大幅	断面厚	重量	
35	銅鏃	調査区内	鏃身部 [1.4] 茎部 1.5	鏃身部 [1.2] 茎部 0.6	鏃身部 [0.2] 茎部 0.3	2.4	有茎小形銅鏃 茎部断面形状一六角形 鏃身部は大半が欠損している。
36	台石	SH25	31.6	24.5	10.5	-	
37	石鏃	調査区内	[1.4]	1.4	0.35	0.6	先端が欠損している。
38	石斧	調査区内	[8.0]	6.5	2.1	105.6	蛤刃石斧 刃や基部の大半が欠損している。



第 6 図 出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第7図 出土遺物実測図2 (S=1/3, 27のみ S=1/4)



第 8 図 出土遺物実測図 3

(29・31・38 は $S=1/3$, 32～35 は $S=1/2$, 36 は $S=1/6$, 37 は $S=1/1$)

Ⅲ まとめ

集落の変遷及び構成について

三谷遺跡第二次調査では、竪穴住居跡 7 軒，テラス状遺構 3 か所，土坑 3 基を確認した。これらの遺構は，出土遺物の特徴から弥生時代後期初頭から古墳時代初頭にわたり営まれていると想定された。ここで，第一次調査の成果もふまえ，今回の調査で新たに確認できたことを加え，遺構を時期別に分類してみたい。なお，同一遺構で複数の時期にまたがる特徴を持つ遺物が出土している例もあるが，基本的には遺物の最新の時期の遺構として分類している。また，竪穴住居跡の規模についても，径や一辺が 3m 前後のものを小型，5m 前後のものを中型，7m 以上のものを大型と三種に大別できるため，あわせて分類する。

- ・後期初頭（Ⅰ期¹⁾）－規模不明：SH28
- ・後期前葉（Ⅱ－1 期）－中型住居：SH27，規模不明：SH30
SH27 の規模は不明だが，主柱の配置から中型以上の規模は想定されるため中型住居に分類した。
- ・後期中葉（Ⅱ－2－②期）－その他の遺構：SX18・SX19・SK17
- ・後期後葉（Ⅱ－2－③期）－大型住居：SH25
- ・後期末葉（Ⅱ－3 期）－その他の遺構：SX17
- ・古墳時代初頭（Ⅲ－1 期）－その他の遺構：SK15

SH23・SH26・SH29・SK16 については明確な時期決定はできなかった。ただし，SH23 は SH25 よりも新しいことが確認できたので，少なくとも後期後葉（Ⅱ－2－③期）以降のものである。また，SH26 は SH25 に先行し，SH27・28 と同時期には存在し得ないことが確認できたことと，SH26 の位置する調査区南側からは埋土も含めて，中期の土器が出土していないことから，後期中葉（Ⅱ－2－②期）のものである可能性が考えられる。SH29 については SH28・30・SX18 よりも新しいことが確認できたため，少なくとも後期中葉（Ⅱ－2－②期）以降のものである。

また，第一次調査で確認した SH21・22 は時期を特定できていなかったが，検出状況から，今回の調査で SH25 として報告した SX13 より新しいこと，また土層観察などから，SH23 → SH22 → SH21 の順に営まれたことを確認していた。そのため，SH23・22・21 は，遺跡全体の出土遺物の時期の下限がⅢ－1 期であることもふまえ，後期後葉（Ⅱ－2－③期）から古墳時代初頭（Ⅲ－1 期）の時期内に収まるものと考えられる。

集落の存続時期としては，第一次調査の結果もふまえると，弥生時代中期終末から後期を通じて営まれ，古墳時代初頭に廃絶したものと想定される。

ここで，第一次調査の成果をふまえて，各時期の集落構成をまとめてみたい。

弥生時代中期末葉—中型住居 1 軒・小型住居 1 軒

弥生時代後期初頭（Ⅰ期）—中型住居 1 軒・小型住居 1 軒・規模不明住居 2 軒

弥生時代後期前葉（Ⅱ—Ⅰ期）—中型住居 3 軒・小型住居 1 軒・規模不明住居 1 軒

弥生時代後期中葉（Ⅱ—Ⅱ—①期）—大型住居 1 軒・中型住居 1 軒・小型住居 1 軒

弥生時代後期中葉（Ⅱ—Ⅱ—②期）—大型住居 1 軒・中型住居 1 軒・小型住居 1 軒

弥生時代後期後葉（Ⅱ—Ⅱ—③期）— 一期 大型住居 2 軒・小型住居 2 軒

二期 大型住居 2 軒・小型住居 2 ～ 3 軒

三期 大型住居 2 軒・小型住居 3 軒

ここで SH25 については、一～三期の中でどこにあたるかが想定できなかったため、便宜上全ての時期に大型住居として計上している。

弥生時代後期末葉（Ⅱ—Ⅲ期）—大型住居 1 軒・中型住居 1 軒・小型住居 3 軒

第一次調査時には、今回の調査区である北西側調査範囲外へ延びる遺構の存在、土石流による流失、段々畑や棚田の築造による削平を根拠に、中期末葉から後期前葉を除き、大型住居 1 軒と中・小型住居 5 軒前後の集落構成を想定していた。今回の調査では、その想定を全ての時期ではないが、補完し得るものとなった。後期初頭では、確認できた住居数が 4 軒となり、各時期の住居数に比肩する数となった。また、後期後葉においては、大型住居（SH25）を確認し、集落に大型住居が 2 軒存在した時期があることが想定された。

また、今回の調査区の面積は第一次調査区の 1/14 にも満たないにも関わらず、7 軒の住居跡が確認できたこと、SH30 や SX18 が今回の調査範囲外へ延びていること、今回の調査区の西側の段では、遺構面が削平されていたことなどを合わせると、第一次調査で想定した数に、数軒の住居が加わる可能性が高いと考えられる。

ここで大型住居 SH25 の性格について考察してみたい。SH25 は残存状況からは、その性格を特定し得なかったが、後期後葉（Ⅱ—Ⅱ—③期）に属する SH7 が居住空間とは考えにくいこともふまえると、第一次調査における役割と同様、集落の中心的な建物であり、集会所・作業場的な役割を果たすものと想定したい。また銅鏃（35）は、SH25 遺構面から直接出土したわけではなく、SH25 に伴うと想定されるものだが、第一次・二次調査を通じて唯一の青銅器の出土である。この銅鏃は実用としてよりは、祭祀的な用途で使用されたと考えられ、SH25 が集会所的な役割を持つ根拠となり得るであろう。

結び

さて、第一次調査のまとめでは、三谷遺跡について、太田川流域、八幡川・石内川流域における集落と同様の様相を呈し、存続時期は弥生時代中期末葉から後期末葉までで、拠点集落の条件を備えている遺跡とした。今回の調査では、そのことを補完する成果に加えて廃絶時期が古墳時代初頭まで下ることを確認した。

現在までの広島湾沿岸部での調査でもⅠ期²⁾からⅢ期まで継続し、Ⅲ期で使用を終える遺跡が少なからず確認されている。このことは、弥生時代後期に開発された集落がⅢ期をもって文化的基盤の変容に伴って終焉を迎えたこと、言い換えれば古墳の出現と同時期に丘陵上の集落を廃棄せざるを得ない状況がある一定の規制力のもとに現出したことを示しているという考え方がある³⁾。古墳時代初頭（Ⅲ－Ⅰ期）の古墳が確認された成岡 A 地点遺跡の存在もふまえ、三谷遺跡は、この考え方を裏付ける好例といえよう。

注

- 1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団 2002 年 以下、後期土器編年は若島氏の編年による。
- 2) 1 に同じ。
- 3) 1 に同じ。

図版



三谷遺跡遠景（航空写真・調査前・南東から）

図版 1



a 三谷遺跡遠景（航空写真・調査前・北西から）



b 三谷遺跡（航空写真・調査後・西から）



a SH23 (南東から)



b SH25・26・27 (北西から)

図版 3



a SH25・27 遺物出土状況（西から）



b 銅鐻出土状況（北から）



a SH26 床面検出状況（西から）



b SH27 床面検出状況（西から）

図版 5



a SH28・29・SX18 (北から)



b SH29・SX18・19・SK17 (西から)



a SH28 遺物出土状況（南から）



b SH29b 床面検出状況（南西から）

図版 7



a SH30 (北から)



b SH30 遺物出土状況 (北から)



a SX19・SK17 (南西から)



b SK15 (西から)

図版 9



a SK15 土層断面（北西から）



b SK16（北西から）



a SX17 (北西から)



b SX17 遺物出土状況 (北西から)

图版 11



出土遺物 (1)



図版 13





図版 15



出土遺物 (5)



報 告 書 抄 録

ふりがな	みたにいせき だいにじちょうさ ーひろしましあきくなかのひがしまちしょざいー							
書 名	三谷遺跡 第二次調査 ー広島市安芸区中野東町所在ー							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 13 集 付編							
編 著 者 名	田村規充 松田雅之							
編 集 機 関	財団法人広島市文化財団 文化科学部 文化財課							
所 在 地	〒 732-0052 広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号							
発行年月日	西暦 2010 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
みたにいせき 三谷遺跡	ひろしまけんひろしま 広島県広島 しあきくなか 市安芸区中 のひがしまち 野東町	34101	ー	34° 23' 34"	132° 34' 47"	20091001 ～ 20091218	140 m ²	安芸 1 区中野 瀬野線建設工 事に伴う埋蔵 文化財発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特 記 事 項	
三谷遺跡	集落跡	弥生時代	住居跡 7 軒 テラス状遺構 3 か所 土坑 3 基			弥生土器 鉄器 青銅器 石器		
要約								
尾根中腹に立地し、弥生時代中期末～後期を通じて継続し、古墳時代初頭に廃絶する拠点集落である。								

(財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第13集 付編

三 谷 遺 跡 第 二 次 調 査

— 広島市安芸区中野東町所在 —

2010年3月

編集発行

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号
TEL 082-568-6511